
アルチュセールのイデオロギー論の解釈の一試論

A reading of Althusser's theory of ideology

SOONHEE FRAYSSE-KIM

Abstract

The term 'ideology' was originally coined by Antoine Destutt De Tracy to describe a 'science of ideas' (*l'étude des idées*). However, no sooner had the term appeared, than the word began to be treated as a synonym for an abstract idea or concept far removed from reality. Since the advent of Marxism, there have been constant disputes and various views on ideology, due to two potentially conflictive theories on ideology expressed by Marx himself, and the clarification of the point at stake, or reconsideration of the theory, has been neglected by traditional Marxists. Indeed ideology was considered mainly as a form of 'bourgeois' propaganda' or 'false consciousness'. Louis Althusser, a French structuralist, defied those traditional interpretations of the idea of Marx and undertook his own reading of Marx's works. In his theory, he elaborated Marxism as *an interpretative discipline (une discipline interprétative* (Garo 2008: 45) liberating it from simple communist or socialist theory. It is in his efforts to redefine Marxism that he conceived an original theory of ideology in which he clarified the materialistic nature of ideology and its function constituting individuals as ideological subjects.

This article is a reading of Althusser's theory of ideology. The reading was done on Althusser's two texts, namely *pour Marx* and *Idéologie et appareils idéologiques d'Etat*. The investigation focuses on his key idea on ideology expressed in the notions of Problématique, Subjection, and Ideological State Apparatuses, seeking to understand the way ideology functions in society through an Althusserian perspective.

1. はじめに

「イデオロギー」は元々「思考の科学」を示す学術語として考案された造語であるが、語の発生とほぼ同時に現実と離れた観念的理論あるいは思想と同義語に扱われるようになった。マルクス主義の誕生以後、イデオロギーに関する相互対立、または相互矛盾するさまざまな見解や論争があったが、一方で従来のマルクス主義者たちのなかからはこれといったイデオロギーの理論は提示されなかった。実際、イデオロギーそのものの原理や性格を究明し、イデオロギーに対す

一つの理論を構築したのはフランスの構造主義者の一人であるルイ・アルチュセール (Louis Althusser) である。彼は、従来のマルクス主義者たちによるマルクスの解釈に抗して、マルクス主義を単なる社会主義あるいは共産主義の理論 (彼によるとイデオロギーの変種にすぎない) から解き放ち、一つの「解釈の分野 *une discipline interprétative*」(Garó 2008: 45) として仕上げることでマルクス主義の研究における新しい地平線を切り開いた。彼はマルクスの著作の新しい読み方を提案する際にマルクス理論の探求の前提条件として首尾一貫した一つのイデオロギー理論を創案するのである。そのなかで彼はイデオロギーを一つの表象体系として定義し、イデオロギーの物質性と個人をイデオロギー的主体に構成するイデオロギーの機能を明らかにした。

本稿はアルチュセールのイデオロギー論の解釈の一試論である。アルチュセールのイデオロギー論の中心概念である「プロブレマティック論」と「主体論」そして「国家イデオロギー装置論」を綿密に読みながらイデオロギーの原理、役割、機能を探ることを通して「一つの表象体系」としてのイデオロギーが社会で機能する仕方を理解しようとする。以下では、まず「イデオロギー」ということばの発生と語の定義、そしてイデオロギーの概念におけるさまざまな「誤解」の原因となったマルクスのイデオロギー論を一瞥した後、アルチュセールのイデオロギー論を探る。

2. ことばの発生

Idéologie (イデオロギー) という用語は、フランスの哲学者デステュット・ド・トラシー (Destutt de Tracy) の1796年の論文に初めて登場したギリシャ語の「*idea* (思考)」と「*logia* (理論)」に起源する新造語である。ド・トラシーは「*une science des idées* (思考の科学)」を称する語として「イデオロギー」を用い、当時「イデオロギー」は「形而上学」や「心理学」に対立する「実証的精神科学と同義語」として使用された。しかしド・トラシーやその周辺の人々の政治的傾向に反感をもった当時の為政者ナポレオンによって、この語はすぐにも彼らを批判するための政治的武器に用いられた。ナポレオンの論駁のなかで、「イデオロギー」は「*idéologues* (イデオログ)」つまり現実ときりはなされた観念的理論の擁護者たちが好む理論にすぎないという否定的な意味を帯びようになる。以来、この語の元の意味はなくなったが、ナポレオンによって付加された「*la valeur péjorative* (軽蔑的な意味)」はいつまでもこの語に付きまとっている。(Dictionnaire Culturel en Langue Française : 1793-1796)

3. イデオロギーの定義

19世紀後半から「イデオロギー」は、ある政府や政党の政治的思想を指し示す政治的概念を帯びようになり、「思考の科学」という元々の意味と全く異なる様々な意味をもつようになった。

イーグルトンが、この用語はそれ自体「さまざまに異なる概念のより糸の束からおりなされた

一つのテキストとってよく、そこに多岐にわたる歴史の痕跡をたどることができる」(イーグルトン1999:20)と言った時、彼はこのことばに内包される意味の多様性と複雑性を説こうとしたことがわかる。つまり「イデオロギー」は使用する人の観点によって非常に多様な内容を持ち、「強い共時的な意味を帯びる」(Reboul 2003:15)語なのである。一般に「イデオロギー」という語の定義には相互に矛盾するものが多く、またその使用における否定的な意味作用が強い。

中立的な意味でイデオロギーは、「特定の社会集団もしくは社会階級に固有の観念の総体」(イーグルトン ibid:22)、つまり、ある集団の人々が共有している思想体系と定義される。その場合、われわれは「イデオロギー」という語を、中立的な社会科学用語として、「社会主義」、「自由主義」、「共産主義」、「エコロジー」等のもろもろの「イズム」、つまり世界の解釈や行動の計画においてある方針を提案する政治的または一つの社会的ドクトリンを指し示すために用いることができる。

しかし、イデオロギーは「一つの間人集団によって共有され、この集団にとって不可欠な事柄に関わり、この集団との関係で機能する」信念体系であり、「集団と一体化し、集団構成員に特有の行動や態度を合理化するために役立つ」(プラムナッツ1972:34)ものと定義されると、ここには「集団の利益」という政治的意味作用が現れる。

「イデオロギー」という語を政治的側面で使用するのはけっこう厄介なものである。なぜならアルチュセールも言うように人々は誰も自分の信条をイデオロギーとは考えないし、イデオロギーはもっぱら他人の思考体系で、しかも批判の余地があるものでしかないのである(アルチュセール1970:89)。そのためドクトリン、またはある思想をイデオロギーと呼ぶことは「ベジョラチブ(軽蔑的)」なイメージを与える(語の造語とほぼ同時につけられたイメージでもあるが)恐れがある。たとえば、冷戦のあいだイデオロギー的に二分された世界では、それぞれの陣営の政治理念はそこに属する国々の支配イデオロギーでもあった。当時いわゆる「自由民主主義」の陣営に属していた韓国や日本の社会で「イデオロギー」というのは、もっぱら東欧の社会主義や、北朝鮮の共産主義を指し示す、「アカ」の思想であった。つまり一般に人々にとって「イデオロギー」というのは、既存の秩序を脅かす、「敵対者の思想」(リクール1980:254)でしかないのである。

しかし、権力者たちが敵の政治的理念を「イデオロギー」として扱うことは、実質的には既存の秩序、つまり現状の政治体制を維持するためである。特定集団の構成員たちに、ある政治的思想体系が「イデオロギー」であると信じ込ませようとする事自体が、すでにイデオロギー的作用であるのだ。例えば、われわれは「反共イデオロギー」に浸っているが故に「アカ」の思想に嫌悪を感じているのである。マルクス主義者にとってはこのような権力の維持に携わるすべての「イズム」こそが「幻想」であり、「偽り」の「イデオロギー」なのである。「イデオロギー」という語がもつ「ベジョラチブ」な意味作用の背後には、明確に分離される2種類の考えが存在するといえる。「イデオロギー」というのは、既存の秩序を脅かすため感化の目的で押し付けられる(敵の)価値体系であるか、さもなければ、既存の秩序を維持する、つまり支配階級の正当化のために作り上げられた偽りの幻想なのである。

イーグルトンは、「イデオロギー」に対する定義を16も列挙している（イーグルトン1999：20-21）。そのなかには前述した「特定の社会集団もしくは社会階級に固有の観念の総体」のように、より中立的な意味の定義もあれば、「支配的政治秩序を正当化するのに貢献する観念（または偽りの観念）」、または「社会的利害に動機づけられた思考形式」のように互いに矛盾しているような定義もある。また定義のなかには「意識的社会行為者が、自分の世界を意味づける時の媒体」といった認識論的なものもあれば、「行為へと促す信念の集合」のような行動に関わるものもある。

イデオロギーの定義をめぐるこのような食い違いは、「イデオロギーという語に刻印された大きな2つの伝統の不和・対立を反映」（ibid：23）していて、以下でみるようにイデオロギー理論における重要な争点になっている。

4. イデオロギーに関する2つの見解

イデオロギーについて対立する2つの見解に係る論争の中心は、認識論における真偽の問題である。

1つの見解は、認識の真偽の問題に主な関心をはらい、イデオロギーをもっぱら偽りの観念、幻想、歪曲、神秘化としてとらえる態度である。伝統的マルクス主義者たちの中心思想がそれである。もう1つの思想の伝統は、認識論的というよりは社会的であって、観念が現実と照応するか否かという問題よりも、観念が社会生活において果たす機能に関心をよせる。

この論争のどちらの側につくかは、ひとえに、あなたがモラル・リアリストであるかどうかできまる。モラル・リアリズムが判断の対象とするもののひとつに、わたしたちのディスクールをふたつの種類に分ける考え方がある。ディスクールの中には、ものごとをありのままに記述する事を目的として、真実か虚偽かの判定に供される言語行為がある。そしていまひとつの言語行為は、価値とか規範を表明するもので、これには真偽の問題はからんでこない。この考え方では、認知的言語と、規範的・規定的言語とはべつのものである。いっぽう、モラル・リアリストが退けるのは、このような『真実』と『価値』の二項対立である。（イーグルトン ibid：52～53）

つまりモラル・リアリストの立場をとる人は、ディスクールのなかで「現実を真正のやりかたでもって記述する部分と、そうでない部分とのあいだに明瞭な境界線がひける」（ibid：53）とする考え方をとる。彼らにとって、「現実を真正のやりかたでもって記述」しない部分は「偽り」のイデオロギー的ディスクールでしかないのである。

一方、それに対立する考え方は、「イデオロギー的ディスクールとは、あるレベルでは真実であるが、あるレベルでは虚偽である。つまり経験によって確かめられる内容においては真実だが、そのディスクールの力によって人を欺くものであるか、さもなければ表面的な意味においては真実だが、その深層にある前提では虚偽であるものこと」（ibid：52）であるとする態度

である。ここにも「偽りの意識」は常に重要な問題を提起しているが、彼らにとって例えば、‘米国の首都はトロントである’という発言と‘ブッシュ大統領は正直な人である’という発言の2つの発言に関わる「偽り」の問題は同じレベルのものではない。つまり前者の発言はその真偽が判断できる認知的レベルのものであるが、後者の発言は、ひとそれぞれの道徳的価値規範によってしか判断できないレベルの問題である。

しかし、モラル・リアリストの見解では物理的事実と、道徳的事実に分けられる2種類の真実のなかで、このような道徳的判断といった規範的発言もまた真偽の判定基準に準ずる問題になるのである。このようなイデオロギー理論における2つの不和・対立の伝統は、マルクスのイデオロギー論それ自体から生じているようにみえる。イデオロギーの「理論のほとんどは唯物論の伝統から生まれてきた」(イーグルトン *ibid* : 84) し、「イデオロギー」の用語に「明確な哲学的意味を付与」したのはマルクス (Reboul 2003 : 17) であるが、今日の「イデオロギー問題」について非常に強い影響を与えたのも「マルクス主義」である (リクール *ibid* : 252) と言える。

5. マルクスのイデオロギー論とその矛盾

ダレム (Dalem 2005) によるとマルクスのイデオロギー論にはイデオロギーに対する2つの異なる理論があり、この2つの理論は相互矛盾している。

1つは、人々の意識を限定するのは社会的条件、つまり階級であり、各社会階級は独自の利害関係に基づく信念体系を作り出す。つまり、特定社会階級の利害関係に限定されていると見なす限り、これは一つのイデオロギーである。

もう1つは、社会の経済的構造によって政治・司法の上部構造が限定されるという考え、つまり経済的構造と生産関係は支配階級 (ブルジョア) と被支配階級 (プロレタリア) の存在条件を生じさせ、前者は後者の従属を容易にするためイデオロギーを作り出す。支配階級は物質的なだけではなく、知的または象徴的手段¹までもコントロールしながら自分らの価値規範を人々に押し付ける。結局、支配階級の価値規範は普遍的価値として社会の中で受け入れられるようになり、マルクスが断言したように「どんな時代でも支配階級の思想は被支配階級の思想」になってしまうのである。

しかし、各階級が自分らの利害に適合するイデオロギーを作り出すという第1理論と、全ての

¹ この類のイデオロギー作用は P.Bourdieu の「pouvoir symbolique 象徴的権力」と「violence symbolique 象徴的暴力」の概念に極めて良く顕われている。「pouvoir symbolique 象徴的権力」は、経済・社会的な成功者に対して人々が彼の成功を個人的メリットとして受け入れることで彼の権力が正当化され、それによってまた彼の社会的成功が容易になる。「violence symbolique 象徴的暴力」は、借金や贈り物などを通じて表れる権力行使で、例えば権力や金力を持つ者は借金や贈り物などを施すことでその受取人と借りの関係を結ぶ。権力者・金力者は、受取者が同じ価値のものを送り返すことが出来ない高値の贈り物を施すことで既に受取者に「恩恵を強いる」「象徴的暴力」の行為を行っている。同時にこのような寛大な行動を通じて受取人側から称賛・承認を生ざせることで彼の権力・金力が正当化される。(P.Bourdieu 1980 *Le sens pratique Minuit* : 210~219)

階級が支配階級の信念体系を自分のものとして取り入れるという第2理論との間には食い違いがある。にもかかわらず、従来のマルクス理論家たちは、「階級意識が潜在するがそれはブルジョアのプロパガンダによって消される」といった考えに基づく解釈に集中しながらマルクス理論の首尾一貫性を保証することだけに専念してきた。また「支配階級による支配はどのように行っているのか?」、「それは意識の次元で行うのか、または無意識的次元の問題であるのか?」、「イデオロギーの消滅はありうるのか?」などの問題が関わっているイデオロギーの役割についての再検討は怠ったまま、もっぱら「支配の道具」としてしかイデオロギーをみなしていなかったのである。(Dalem 2005 : 1793-1796)

イーグルトン(1999)のいう「モラル・リアリスト」的見方をもつ従来のマルクス主義者の関心の焦点は、「認識の真偽にかかわる観念の問題」であり、彼らはイデオロギーを「もっぱらイリュージョン、歪曲、神秘化」つまり「偽りの意識」としてとらえてきたのである。

こうした従来のマルクス主義者たちの(ルカーチ、サルトルが代表的にあげられる)マルクス解釈を全面的に批判し、マルクス理論の解釈における「新しい伝統を切り開いた」(コニール1968 : 75)のがアルチュセールである。

アルチュセールによると「ある一つのイデオロギーとは、ある所与の社会内において歴史上の实在と役割を与えられた、表象(それは場合によって、イメージ、神話、観念あるいは概念)の一つの体系(その固有の論理と厳密さを保持している)」である。彼は、宗教、倫理、哲学などのあらゆる思想体系を一つのイデオロギーと見なし、このようなイデオロギーの諸形態は、経済活動、政治組織と並んで、どんな社会においてもその实在が確認される3つの基本的な構成体の一つをなしていると論じる(アルチュセール1965 : 411)。

つまりアルチュセールにおいてイデオロギーは、認識論上の「偽りの意識」ではなく社会的全体的な有機的な一部分をなす一つのシステムなのである。

人間社会は、歴史上その生命活動に不可欠でさえある基本要素として、その呼吸作用に不可欠でさえある空気として、イデオロギーを排出する。イデオロギー本位の世界観だけが、イデオロギーなしの社会を想像できたし、イデオロギー(イデオロギーの何らかの歴史上の形態ではなく)が痕跡をのこさずに消滅し科学にとって代わられるような世界についての、ユートピア的な観念を認めることができたのだ。(ibid : 412)

アルチュセールにとってイデオロギーは「表象するもの」であるが、これらの表象は「構造」として、意識されずに大多数の人々に認められる。つまり「文化的な対象物として認知され、承諾され、受け入れられるのであって、人間に気づかれない過程をとおして、機能的に人間に働きかける」(ibid : 414)のである。

イーグルトンは言う :

アルチュセールによればイデオロギーは、意味作用実践を独特のしかたで組織化したものの中で、人間を社会的主体として構成する働きのあるものであって、ここから産出される生きられた

関係というのが、社会的主体を社会の中の支配的な生産様式と結びつけることになる。(イーグルトン1999: 55)

イーグルトンは、アルチュセールのイデオロギーの概念が、こうした関係から生まれるさまざまな政治の様式、つまり支配的権力に一体化しようとする姿勢から、支配的権力に対する反抗的姿勢にいたるまでの広範囲をカバーしているようにみえるが、結局のところイデオロギーに関する考察を「支配的社会構成体に奉仕するものという狭い意味だけに着目する方向にすすめてしまう」と批判する。

しかし、アルチュセールは、後でより詳しく論じることになるが、彼の独自のイデオロギーの理論である「国家イデオロギー装置論」のなかで、支配的イデオロギーはまずは国家装置のなかに現実化するが、それぞれの国家イデオロギー装置のなかで特定の派生的なイデオロギーが生産され、多様化していくと語っている(アルチュセール1970: 53)。つまり彼は、支配的イデオロギーの働きのなかから生じる敵対イデオロギーの発生を弁証法的に推論する過程で、上で既に見たマルクスのイデオロギーに対する相互矛盾しているようにみえる2つの考え方を総合していると考えられる。これはまさにその後のペシュュー(Pêcheux)のディスクール理論を発展させる基礎を形成しているのである。

アルチュセールはイデオロギーの研究を「認知理論から情動理論へ」(イーグルトン *ibid*: 57) 移行させながら、つまり「イデオロギーを主題的なものではなく、働くものとしてとらえ」(リクール1980: 259) ながらマルクス解釈における新しいパラダイムを試みたのであるが、同時にこれは「マルクス主義史上初めてのイデオロギー理論の構築」(アルチュセール *ibid*: 59) の試みでもある。

6. アルチュセールのイデオロギー論

6.1 マルクスの再解釈

ルイ・アルチュセールは20世紀フランス構造主義を代表する理論家である。マルクス主義者として、従来のマルクス主義者たちによるマルクス解釈を批判し、マルクスの著作をフランス構造主義が開拓した「エピステモロジー：科学的認識論」²の枠内で再解釈することを提案した。

アルチュセールは、人間存在の意味と歴史に関する論述に専念している従来のマルクスの解釈者たちのマルクス理論の「ヒューマニスト的」解釈は、「マルクス主義の理論を脅かす観念論的」

² G. バシュラールから借用した概念である。「エピステモロジー：科学的認識論」はイデオロギーの混ざっているある前科学的問題意識が、純科学的問題意識に変異することを表わすものであり、この変異の結果作り出されたものは、完全に独創的なものなのである。これは創設行為であり、以前の物はまったく何も取り入れておらず、その代わりに新しい問題意識を、新しい探索分野を、そして根源的にあたらしい諸概念をうちだすことである。(コニール1967: 71)

(アルチュセール1965:14) 解釈であると論じる。彼は「ヒューマニズム」の概念、つまり歴史の主体は具体的な現実の人間であるという思想を重視してきたマルクス主義の伝統において、「社会主義」と「ヒューマニズム」という一組のことばに含まれている「理論上の不釣り合い」をとりあげる。マルクス主義的な見解の文脈で「社会主義」というのは「科学上」の概念であるが、本来の社会主義者が拒否していた「人格のブルジョア的」な「ヒューマニズム」の概念は「イデオロギー上の概念」にすぎない。なぜならば、諸々の概念にその現実を認識する方法をあたえる「科学的な概念」とは異なり、「ヒューマニズム」の概念は「ある特殊な（イデオロギー上の）様式」によって、実在する「現実の総体」を指示しているものの、その現実を認識する方法をあたえないイデオロギー上の概念でしかないからである (ibid: 392-396)。

わたしはすでに（「マルクス主義とヒューマニズム」のなかで：筆者付言）マルクス主義的または社会主義的「ヒューマニズム」というテーマの今日の氾濫をイデオロギー的現象として解釈した。それによってわたしは決して社会的現象としてのイデオロギーそれ自体を非難したのではない。（中略）イデオロギーは、その宗教的、道徳的、法制的、政治的、その他の形態において、一つの客観的な社会的現実である。（中略）それに反して、わたしが批判したのはイデオロギーの理論的諸結果であり、それはつねに科学的知識にとっての脅威または障害をなすのである。（ibid: 15傍点は原著）

アルチュセールが警戒するのは、「イデオロギーのイデオロギー的性格をイデオロギーによって」否定する従来のマルクス主義者たちの態度であると考えられる。そしてこのような態度こそが、アルチュセールによると「イデオロギーの効果の一つ」なのである。彼は「私がイデオロギーの中にいるとか、私はイデオロギーのなかにいたと言うためには、イデオロギーの外に、すなわち科学的認識の立場に立たなければならない」（アルチュセール1970:89）と論じる。

アルチュセールは、従来のマルクス主義者の「ヒューマニズム」的マルクス解釈の基礎になる「前マルクス主義的で観念論的な観念」（アルチュセール1965:16）と、マルクス主義哲学の真の理論的基礎とのあいだに境界線を引くことを提案する。彼は、マルクスの青年期の著作に底流するイデオロギー的「プロブレマティック」³と、晩年の著作『資本論』の科学的「プロブレマティック」とのあいだの根本的差異を検討し、マルクスの理論的再発見を試みた。そうしながら彼は「認識論的切断」の概念を中心とする「構造」の概念を取り入れることでマルクスの思想の新しい解釈の方法を開拓したのである (ibid: 16-19)。

「認識論上の切断」とは、ある理論を築く時、既存のイデオロギー的な哲学的意識（より単純にいうと学問のパラダイム）から切り離し、同時に新しい哲学的意識（または新しい学問のパラ

³ 「プロブレマティック *problématique*」は、日本語で「問いの構造」（今村1997）、「問題設定」（柳内1999）、「問題構成」（大橋 in イーグルトン1999）などに訳されているが、この段階では一応「ある一つの思想の、もしくは、こうした思想を可能にする諸々の思考の具体的で限定された構造」（柳内:188）または「どんな歴史的段階にも存在し、わたしたちが発言できることや考えられることの限界を画定する特殊なカテゴリーの組織」（イーグルトン1999:187）と理解しておこう。本論ではそのまま「プロブレマティック」と用いる。

ダイム)へと移行する行為と理解できる。言い換えれば、前科学的な知識の歴史的空間を前提とし、その中に形成されているイデオロギー的障害を乗り越えることで新しい認識がうまれて来る状況をいう(桜井哲夫1996:78-80)。

アルチュセールによると、マルクスの青年期の著作は「人間の哲学」を理論的基礎としているが、『資本論』に代表される1845年以後の著作からは「あらゆる哲学的人間学、あるいはあらゆる哲学的ヒューマニズム」(ibid:404)から切り抜け、つまり前「プロブレマティック」のイデオロギー的空間から抜け出して、新しい思考のパラダイム、「世界にむかって問題を提起する新しい体系的なやり方であり、新しい原理であり、新しい方法」を構築した。アルチュセールはその時、真のマルクス主義哲学が生まれたと断言する(ibid:403-410)。

本論でアルチュセールのマルクス論全体を検証することはできない(確かにこれは現在の筆者の能力を超える莫大な作業である)。私は、ここでマルクスの新しい読み方の前提としてアルチュセールが構築したイデオロギー論を考察しようと思う。

6.2 イデオロギーの原理

アルチュセールは、マルクスの新しい読み方の前提として、「イデオロギーの発展理論についてのマルクス主義的諸原理」を次のように提案する。

- ①それぞれのイデオロギーは固有のプロブレマティックによって内的に統一される。
- ②特定のイデオロギーの意味は真理との関係に依存するのではなく、現存するイデオロギーの場及びそれを支え、そこに反映する社会問題と社会構造との関係に依存する。
- ③特定のイデオロギーの発展の原動力は、従ってイデオロギーそれ自体の内部に存在するのではなく、イデオロギーの作者または具体的個人が根づいている社会的歴史的脈絡に内在する(アルチュセール1965:95)。

これらの原理を通してアルチュセールが目指したのは、あるイデオロギーの内容やその真偽を問うことではなく、イデオロギーそのものの理解のために1つの理論を構築することであった。マルクス主義者たちが科学以外の全ての知的生産物をイデオロギーとみなし、マルクス主義は科学的であるからイデオロギーではないというならば、彼らはまずイデオロギーそのものを理解する原理をもつべきではないだろうか?つまりアルチュセールの言葉を借りるなら「探求はまず、探求の諸条件を明確にする」(ibid:60)必要があるのではないかということになる。

アルチュセールのイデオロギー理論は、主に1965年に出版された『資本論を読む』と『マルクスのために』、そして1970年に出された『イデオロギーと国家のイデオロギー装置』の3編の著作に展開されている。これらのなかの『マルクスのために』には認識論的観点からのイデオロギー論、つまり「プロブレマティック」理論が展開されている。しかし彼のイデオロギー論が中心的に論述されているのは『イデオロギーと国家イデオロギー装置』である。

アルチュセールはイデオロギーを構造と機能の観点から解いている。それはまず「プロブレマティック」論を通じてイデオロギーを一つの構造と想定し、イデオロギーの固有の性質・構造(「プロブレマティック」、主体の「呼びかけ」とその「主体」が行う物質的「プラチック⁴(実際行為、

慣習行為)』)を解明し、その上で国家イデオロギー装置によって働くイデオロギーの機能を究明する作業である。

ここで筆者は、難解なアルチュセールのイデオロギー論を、まず「プロブレマティック」理論、次にイデオロギーに固有の性質（ここではイデオロギーの物質性とイデオロギー的主体が言及される）、そしてイデオロギーの機能（国家イデオロギー装置論）の3つにわけて、解説を試みる。

6.2.1 プロブレマティック：イデオロギー的空間

人間はイデオロギーのなかで、イデオロギーをとおして、イデオロギーによって生きる。(アルチュセール『マルクスのために』：414)

アルチュセールは「イデオロギーの世界はそれ自体が固有の認識原理である」(アルチュセール1965：86)と述べ、ある限定されたイデオロギー的思想の統一性を示す「プロブレマティック *Le Problématique Théorique*」の概念を提案した。

「プロブレマティック」は、特定の時期に言語活動を行う人々の自己表現を限定するイデオロギーの場を示す。つまり人々が抱く「諸問題の意味と方向、従ってそれらの解決の意味とその方向をその中で決定」する、思考の「理論的諸前提」(ibid：106)である。つまり「プロブレマティック」は一つの‘可能な思考’の世界である。極めて単純に言えば、特定時期のある社会のなかで生きている人々が発想し、問い、そしてまたそれに対する答えが求められる諸思考活動の可能な範囲である。解答が存しない問いはありえない、なぜならば解答も問いも1つの「プロブレマティック」に属するものであるから。

アルチュセールは言う。

人はだれでもある日どこかで生まれ、ある所⁴の世界のなかで考えはじめ、書きはじめなければならない。この世界は一人の思想家にとっては、とりもなおさず、彼の時代に生きるさまざまな思想の世界であり、彼がそこで思考をはじめたイデオロギーの世界である。(ibid：114傍点は原著)

「プロブレマティック」の基本構造は、イーグルトンの説明のように、「閉じられ循環的で自己確認的なもの」であり「その内部でどこにどう動こうとも、最後にはいつも、既に知られた確実なものへともどってくる。また未知なものと言っても、それはすでに知られていることの単なる延長線上にあるか、たんなる反復にすぎない」(イーグルトン1999：288)閉鎖的構造である。今村(1997)の言葉を借りると、これは「一つの思想図式」でもあり、「どういう問いを問いとして許容するか、どういう解答を解答として許すのかを知らぬ間に方向づける」人々の思考体系を限定させる枠であると同時に、「自ら世界を理解する原理の中心にあるもの」(今村1997：138-

⁴ フランス語の *pratique* (プラチック) は日本語で「実践」、「実際に行うこと」、「経験」、「慣習」、「習慣」などと訳され、それぞれの言葉の間には微妙な相違がある。そのため本論ではそのまま「プラチック」と用いるが、文脈の意味に応じて最もふさわしいと思われる日本語の訳を付け加えるようにした。

139)である。つまり、人々は現存のイデオロギー世界のなかで考えることを学び、この世界のなかで成長し、この世界において行動し生きることを学び、この世界に対して自己を説明するのである⁵。

言い換えると、社会のなかで生きる人々は自分の「世界」を生きているのであるが、それは結局「自分のイデオロギーのなかで、イデオロギーをとおして、イデオロギーによって生きる」(アルチュセール *ibid* : 414) という意味である。「世界を生きること」は「イデオロギーを生きる」ことであるというアルチュセールのテーゼを今村 (1997) は以下のように説く。

世界を生きたるとは、人間と世界との現実的關係 (人間の生存条件) を想像的に生きることである。イデオロギーは現実の世界關係を想像的關係に轉換し、そうすることで人間が現実の世界を生きるようにする。想像的關係は單純に否定的な事態ではなく、そのなかに現実的關係の眞實を包括している。想像によって變形されているにせよ、現実の關係はたしかにイデオロギーによって表現される。人間はそうした回り道によってしか、希望、期待、意志あるいは過去への憧憬を表現できない。そこに人間がいつも神話を、芸術的な形や宗教的な形で生み出す理由があるのであり、神話的なものもつ魅力的な力もそこから出てくる。だから、単にイデオロギーをマイナスの幻想として拒絶するのは間違ひである。(今村1997 : 173)

つまり、イデオロギーは人間の生きる条件そのものであるということである。その時、問題になるのは、実在する現実の総体であるイデオロギーそれ自体ではなく、その現実を認識する方法なのである。アルチュセールによると、イデオロギーを認識することは、「ある所与の社会における、このイデオロギーの可能条件、その構造、その種差的 (*spécificifique*) な論理、その実践的な役割等を認識することであり、同時にその必要条件を認識」(*ibid* : 408-409) することである。さらにイデオロギーを認識することによって、「イデオロギーに対して働きかけること、イデオロギーを《歴史》に対して働きかける行動の綿密な道具にかえることができる」(*ibid* : 413) と論じる。

6.2.2 イデオロギーの性質

6.2.2.1 イデオロギーの物質性

ある一つのイデオロギーとは、ある所与の社会内において歴史上の實在と役割とを与えられた、表象 (それは場合によって、イメージ、神話、観念、あるいは概念) の一つの体系 (その固有の論理と厳密さを保持している) である。(アルチュセール『マルクスのために』: 411)

⁵ 類似の概念はフーコーの「エピステーメ *epistémé*」である。これは「ある与えられた時代において、諸々の認識論的形象、科学、そして時には形式化されたシステムを生み出すさまざまなディスクール実践を統一する諸関連の総体」(Foucault 1969 : 250 (中村雄二郎訳 : 290)) である。マクドネルの解釈を借りると、その総体は特定の時期にやはり特定の陳述が知の仲間入りをするための「思考の基礎」であり、フーコーはこの概念を通じて知の概念そのものが確たる規則体系を持つことを論じている。この「知の総体」はディスクールの規則性の次元で分析する時に発見できる、それら科学の間にはりめぐらされた関連性のネットワークである。

(マクドネル1990 : 122-123)

アルチュセールによると、宗教的イデオロギー、道徳的イデオロギー、法的イデオロギー等々は、それだけの数の「世界観」ともいえるが、こういった「世界観」やイデオロギーは「現実に対応」していない、想像的に転倒したもので「イデオロギーの中で、人が見いだす世界の想像的表象に反映されているもの、それは人間の存在諸条件であり、人間の現実の世界」である。つまり、アルチュセールは、イデオロギーの中で表象されているのは「諸個人の存在を統制する現実の諸関係のシステム」すなわち実際の世界ではなく、「諸個人と彼がそのもとで生きる現実的諸関係との想像上の関係」すなわち彼が生きる現実世界であると述べる(アルチュセール1970:660-67)。柳内(1970)の解釈を借りると、人々が自分の存在諸条件と現実に関わる時、その関係は社会構成体のなかで自分がどのような位置を占めているかに関わるものである。

その位置はマクロ的・長期的には生産諸関係によって決定されるが、ミクロ・短期的にみれば、様々な審級によって多様に決定されている。すなわち、経済的には労働者や小生産者や資本家として生きており、また学校制度により、資格が付与され、様々な階層へと割り振りされ、政治的-法的には「自由で平等な主体」として形成され、「清き一票」をもった選挙民ともなる。(柳内1970:180)

アルチュセールは「イデオロギーを構成していると思われる《諸観念》や《諸表象》は、構想的、観念的、精神的存在ではなく、物質的存在をもつ」(ibid:72)と主張する。例えば、非常に単純ないかたであるが、学校の教科書の内容は、「支配イデオロギー」が「学校イデオロギー装置」の「プラチック：実際の作動」によって実現された、つまり物質化されたものと考えられることができるのであろう。

アルチュセールはイデオロギーの物質性を信仰の儀式を例にあげて説明する。

ある個人が神を信じていることは、信仰という「諸観念」の「主体」になることである。アルチュセールはここで個人と「完全にイデオロギー的な概念の仕掛け」(ibid:75)になった「主体」とを分けて考えている。(ここで「主体」は、イデオロギー化された個人を示すことと考えられる。)

その時「主体」は、自分が何かを信じることは全く自分の自由意志であると信じる。こうした「主体」は、彼自身の「諸観念」に従って行動しなければ、「良くないことだ」と考えながら、「諸観念」に従った「プラチック：実際行為」を行おうと努める。もし彼が信じるところに従って行動すべきはずの事柄を行わなかったとすれば、それは「言行不一致」の人間または「背徳的」な人間であることを暗示する。そうすることで、彼の信仰イデオロギーは、ミサに出席したり、祈り、贖罪したりする儀式による「プラチック：慣習行為」によって現実化されるのである(ibid:74-76)。

このように考えると、われわれがスポーツ大会や教室での授業、政党の集会など日常生活の様々な場で、その場で「とるべき行動をとる」ということは、結局のところ、われわれの頭のなかに刻まれている諸観念に従って行う「プラチック：慣習行為」なのである。つまりキリスト教とかイスラム教という信仰や共産主義や反共産主義などの信念はただの観念ではなく、「プラチック：

慣習行為」によって実現される物質的な活動である。つまりワールドトレードセンターに突入したのは飛行機ではなくイスラム原理主義のイデオロギーだったのである。

アルチュセールのイデオロギー論の中で「観念」が「プラチック、儀式、イデオロギー装置」のようなことばによって取って代われ、「主体、意識、信仰、活動」などのことばが用いられることは、イデオロギーはもはや人間の精神的活動によって形成される観念的なものではなく、「プラチック：実際行為」を通じて実現される物質的なものとしてみなされるからである。そのなかで中心のかつ決定的なものは「主体」という概念である。なぜなら「プラチック：慣習行動」はイデオロギーによって存在するが、同時にイデオロギーは「主体によって」または「主体に対してのみ存在しない」(ibid: 80) からである。

6.2.2.2 イデオロギーと主体

イデオロギーは主体として諸個人に呼びかける。(アルチュセール『イデオロギーと国家イデオロギー装置』: 81)

アルチュセールによると、イデオロギーは個人を「主体」ならしめることによってしか機能し得ない。「主体」はイデオロギーの担い手であり、「主体」なきイデオロギーは存し得ない。「主体」とはイデオロギーの「呼びかけ l'interpellation」機能によって生み出された結果であり、「呼びかけ」は「個人を主体として構成する機能」と、主体に「自分は自由な個人であることは明白な事実だ」と「信じ込ませる機能」の重層的構造に置いて作用するものである(アルチュセール 1970: 83)。

つまり、われわれにとって「自分の信念や信仰に従って良心的な行為を行う」ということは、イデオロギー的主体としてイデオロギーの物質的儀式によって規則化された「プラチック：慣習行為」を果たしているのであり、その行為によってわれわれがもつ信念や信仰などの「イデオロギーが機能しかつ存在する」のである(ibid: 84)。しかし、我々はこういった行為をイデオロギー的であるということを意識せず、「無意識のうちに」または「自然にイデオロギーの中で生きている」。そのため「私は自由で道徳的等々の主体である」ことは明らかな真実であると信じるのが自然な反応であるが、この「明証性」こそ、イデオロギー的效果である。アルチュセールはこれを「イデオロギー的再認の機能」(ibid: 85) という。

イデオロギーの「呼びかけ」機能は「ディスクール」として捉えられる。要するに個人から「主体」への転換や形成はイデオロギー的ディスクールを舞台にして展開するのである。

(主体は) 文字通りイデオロギー的ディスクールの中に登場しており、従ってこのディスクールは必然的に、それが呼びかける主体と結びついたディスクールであり、だから必ずディスクールのシニフィアンとしての主体を含む。またそれゆえに、主体はまるごとイデオロギー的ディスクールの数々のシニフィアンの間に登場する。個体が呼びかけられて主体へと構成されるためには、彼はイデオロギー的ディスクールのなかの主体として自己を再認しなければならず、そのディスクールのなかに姿を現していなくてはならない。(中略) すなわち、呼びかけられた主体は、

呼びかけるディスクールのなかに自分を見ることができる。

(アルチュセール1966：134 cite in 今村1997：268)

イデオロギーによる「呼びかけ」作用の実例は、教科書のなかの‘われわれ’や‘私’の過剰使用でも顕われる。子供たちは、絶えず反復される‘われわれ’や‘私’に一体化することによって、教科書の中の語りの「主語／主体」になることを学びながらイデオロギー的ディスクールのなかの主人公として自己を再認識するのである。このような学校教科書での「呼びかけ」作用はフレスーキム（2007, 2009）が詳しく検証している。

アルチュセールは、イデオロギーと「主体」との有機的な関係を次のように描く。イデオロギーの中の主体は2つのカテゴリに分けられる。まずは、「主体＝イデオロギー」（大文字のSで表記する）がいる。そしてSによって「呼びかけられ」て「変えられ」た「イデオロギー的主体」（小文字のsで表記する）がいる。Sの存在はsによって保証され、sはSを必要とする。アルチュセールは、このような相互必要的「S—s」の関係をキリスト教の信仰、つまり「最高度の主体として自ら規定」している「神」に呼びかけられた個人が「神」の存在を信じて、それに服従する「主体」として自らを認める「神—民」の関係に例えている（アルチュセール1966：95～97）。

アルチュセールは、唯一絶対的な主体（S）の名において諸主体（s）としての諸個人に呼びかけるあらゆるイデオロギーの構造は反射的であると論じる。つまり呼びかけられた諸個人はイデオロギーの鏡に反射される自己を自己として認識し、以来、イデオロギーを通してしか自己の確認ができない「主体s」になり、その結果イデオロギーの構成要素として機能するのである。

あらゆるイデオロギーは中心化されること、**絶対的主体は中心**というただひとつの場所を占め、イデオロギーが諸主体を**主体**に服従させるような二重の反射的關係にもとづいて、イデオロギーの周辺にいる諸主体としての無数の個人に呼びかけることである。そして、イデオロギーはどんな主体もそこでは（現在および未来の）自分の姿を熟視しうる**主体**の中で、諸個人に保証を与えることによって諸主体を**主体**に服従させているのだが、この保証とはすなわち神を認め、神によって自らを認める人々は救済されるであろうと言う保証である。（ibid：90-91太字は原著のもの）

このようなイデオロギーの呼びかけの構造は次のように図式化されうる。

「主体s」が「自由な主体」と言われるのは、「主体S」に自主的に従うため、つまり服従を自主的に受け入れるためであり、それゆえその服従の身振りや行為つまり「プラチック：慣習行為」を自主的に成し遂げるためである。そして「呼びかけ」→「主体Sへの服従」→「普遍的再認」⇔「絶対的保証」といったイデオロギーの構造的メカニズムの中で形成された「主体s」は、その構造の一要素として機能するようになる。

「主体」がイデオロギーの要素として機能するというのは、「主体」が現実を實際経験によって認識するのではなく、イデオロギーを通じて「再認」することである。つまり「現存する事物はこのように存在し別な風には存在しないということは本当である」（ibid：100）ということをして「再認」することだが、その「現存する事物」というのは、「生産諸関係」の現在の形態である。

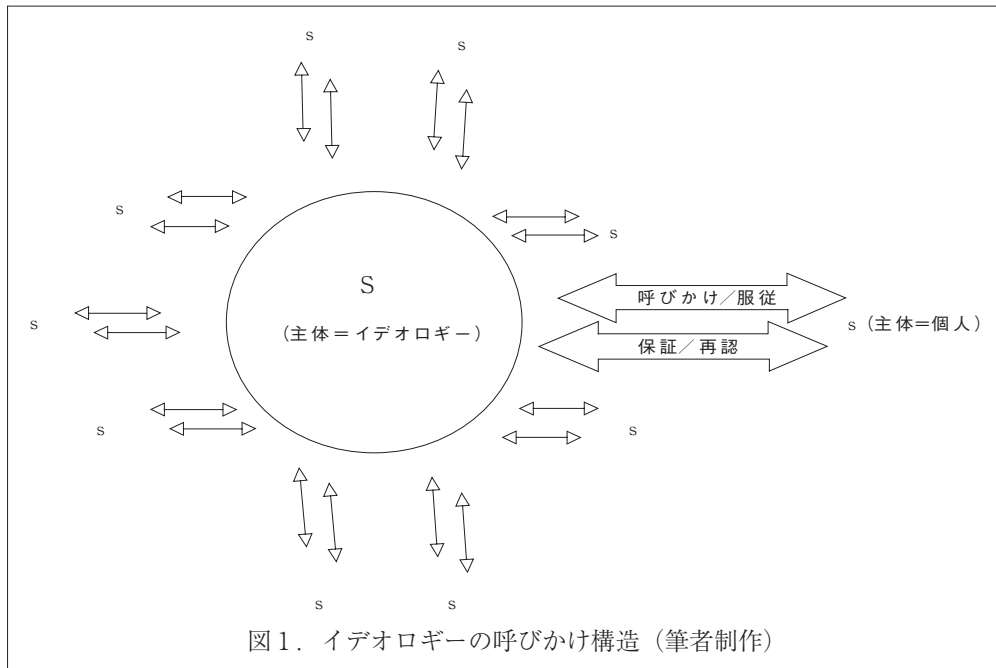


図1. イデオロギーの呼びかけ構造 (筆者制作)

そして「主体」がそれを自然なこととして認めることによってその社会の「生産諸関係とそこから派生する諸関係の再生産」が保証されるのである (ibid: 100-102)。アルチュセールは、いかにして資本主義社会における生産諸関係の再生産が保証されるかという問題を「国家イデオロギー装置論」で取り扱っている。

6.2.2.3 イデオロギーの機能—イデオロギーと国家イデオロギー装置

(1) 国家イデオロギー装置

社会構成体は生産を行うと同時に生産諸条件の再生産を行わない限り、1年たりとも生きながらえることはできない、と言うことは子供でも知っている。(マルクス cit in アルチュセール『イデオロギーと国家のイデオロギー装置』: 9)

国家は一つの「機械 une machine」と考えられ、国家の基本的な機能として「国家装置」がある。「国家権力」(変動するもの)と「国家装置」(変動しないもの)を区別することはマルクス・レーニン主義の古典的理論であるが、アルチュセールはここから「国家イデオロギー装置」という概念を発展させる。

彼は、「国家装置」を「国家抑圧装置: Appareils d'Etat」(以後 AE)と「国家イデオロギー装置: Appareils Idéologique d'Etat」(以後 AIE)に区分して、それぞれの構成と働きを次のように説き明かす。

AE、つまり「国家抑圧装置」は、政府、行政機関、軍隊、警察、裁判所、監獄等であり、こ

これらの装置は「暴力によって機能」する。

一方、AIE、「国家イデオロギー装置」は以下の諸制度とみなされる：

- 宗教的 AIE (様々な教会制度)
- 家族的 AIE
- 法的 AIE
- 政治的 AIE (政治制度、その中での様々な政党)
- 組合的 AIE
- 情報の AIE (新聞、ラジオ、テレビなど)
- 文化的 AIE (文学、美術、スポーツなど)

(アルチュセール1970：35-36)

AEは、1つの国家において1つの存在として統一されており、全体的に公的な領域に属しているのに対して、AIEは複数で、全体として構成している統一性を直接確認できない形で共存しており、その大部分は私的領域に属している。2つの装置の間の基本的な違いは、AEは「暴力によって機能」し、AIEは「イデオロギーによって機能」することである。

しかしAEの機能の中にも、例えば軍隊が彼ら自身の団結と再生産のために「諸価値」を提示する等、イデオロギーによって機能する側面もある。同じく、学校等のAIE装置のなかでも処罰などの暴力によって機能する側面もある。ゆえに「AEの働きとAIEの働きとの間の、時として明白であり、時として隠れている非常に微妙な結合が絶えず織り込まれていること」(ibid：39-40))が理解される。

ここでアルチュセールは「AIEにおいて機能しているイデオロギーはその多様性や矛盾にもかかわらず、支配階級のイデオロギーである支配的イデオロギーのもとで常に統一されている」と述べ、AIEが「圧倒的な主要な機能を果たして」いることと、上記のように「多様性を統一」することがAIEの「機能それ自体」であることを指摘している。そして「いかなる階級も国家のイデオロギー的諸装置によって、またはそのなかで、同時にそのヘゲモニーを行使しない限り、恒久的に国家権力を掌握することはできない」(ibid：40-41)という。しかし、AIEはAEのように簡単に支配下におさめることができない。その理由の1つは、AIEに依然と強大な地位を維持している古い支配階級の「遺制」の存在と、もう1つは、現実の社会の諸矛盾に抵抗する被支配階級のイデオロギー抗争がAIEを通じて自らの主張を表明する手段や機会を見いだそうとするからである (ibid：51-52)。

つまり支配イデオロギーによって統制されているといっても、敵対するイデオロギーの介入の余地は諸AIEの中で可能である。ゆえに諸AIEを「貫通」している支配階級のイデオロギーの周りにそれに立ち向かう派生的なイデオロギーが形成されうるのである。

ここで大事なことは、イデオロギーの多様性と複雑性で、それは支配イデオロギーの下で(またはその中で)様々な力関係や階級闘争が存在する余地を示唆していると思われる。つまり、「多様性を統一する」といっても、諸AIEが支配イデオロギーの下に完全に制圧されることはなく、むしろAIEは常に「階級闘争の場」として、イデオロギーの葛藤が起っている場として捉えら

れていることである。つまり「イデオロギーは閉じこまれた領域ではなく開かれ、イデオロギーの外にある力関係に引き裂かれて」（柳内1970：182）いるのである。ゆえにAIEの中で立ち向かう支配階級のイデオロギーと被支配階級のイデオロギーは敵対関係を保ちながら形成されることが想定できる。そのため「イデオロギーを『現実的關係』から捉えることはイデオロギーをその「外」から位置づけることになる」（ibid：182）つまり、支配階級のイデオロギーも被支配階級のイデオロギーも対応関係によって形成されるのである。これはイデオロギーの産出・衰退に関する極めて重要な論点で、マクドネル（1986）の指摘のように「支配や抵抗の手段として作られるイデオロギーがまったく自由に自らの条件を定める」ことは決してないことであり、「その特徴は対立相手によって決まる」といったアルチュセールの考えは、イデオロギーとディスクールの研究に大事な進歩をもたらしたのである（マクドネル1986：48）。

（2）生産諸関係の再生産と学校

柳内は、アルチュセールが、イデオロギー装置を国家装置であると想定しているのは、彼が国家を「生産諸関係の再生産から位置づけている」からであるという。国家は、このようなイデオロギー装置を機能させ、「諸個人を既成の秩序に固定化し、支配イデオロギーに従わせ」ながら既存の生産諸関係の持続に努めるのである（柳内1970：185）。

資本主義国家のあらゆるAIE国家イデオロギー装置は、それぞれ固有の仕方働きながらすべてが同じ結果、すなわち資本主義的社会的再生産、アルチュセールのことばで言うと「資本主義的搾取諸関係の再生産に貢献」するのである。例えば、「民主主義的イデオロギーに諸個人を服従させることによって」働く「政治的装置」や「ラジオ、テレビを通じて全ての《市民》に、民族主義、盲目的愛国主義、自由主義、道徳主義等を毎日一定量詰め込む」「情報装置」や「盲目的愛国主義におけるスポーツの役割」を「第一義」におく「文化装置」、そして「宗教装置」、「家族装置」等々（アルチュセール1970：52）は、究極的に既存の社会秩序の維持に貢献するのである。要するに特定の国家体制または社会構造は、さまざまな「国家イデオロギー装置」によるイデオロギー作用によってその存続が保証されるのである。

そのなかでも学校は、アルチュセールによると、前資本主義期の教会に代わり「かつて教会が家族と組み合わせられていたように、学校が家族と組み合わせられ」（ibid：57）、現代資本主義社会において、主導的な国家イデオロギー装置としての役割を果たしている。

なぜ学校がAIEのなかで主導的な位置を占めているのか。

いかなる国家のイデオロギー装置もそれほど長い年月、1日8時間の割合で週に5日～6日、義務的聴講（当然のことながら、それは無料である）を設定し、資本主義的社会構成体に所属する子供全体を自由に操作することはない。（ibid：55）

アルチュセールは、現代資本主義社会の学校は、あらゆる社会階級の子供を引き受け社会生活の諸機能を教えると同時に、「支配者のイデオロギーで包装された一定量の『知ること—するこ

と *savoir-faire*』(フランス語、計算、博物学、諸科学、文学) や純粹状態での支配イデオロギーそのもの(道徳、公民教育、哲学)」を注入する場所であると主張する。またこれらの「知ること—すること *savoir-faire*」は、子供たちを支配者のイデオロギーに従属させるのみならず、ある種の分裂を制度化するものでもあると指摘する。つまり、学習成績によって労働者や小農民のような、いわば支配イデオロギーに従属する階級からこのイデオロギーの道具を操るものに分けられる社会的分裂が行われる場所でもあると指摘している (ibid : 53-54)。

公教育と「国語」すなわち「共通語」の普及による言語と教育の中央集権制が引き起こす必然的な矛盾と分裂の現象 (Balibar & Macherey 1974 cit in Pêcheux 1983: 60) も学校による分裂の制度化の一例であろう。このような学校による分裂の制度化の現象は、‘新しい’教育の社会学者たち (Young 1971, Bernstein 1971, Bourdieu 1970; 1976等) の中心論点にもなっている。

結局、現代資本主義社会体制のなかで、学校は社会体制の維持、再生産において極めて特権的位置を占めているということになる。その特権というのは公的義務教育制度であり、現代資本主義国家はそれを通じて幼い時から社会のほぼ全構成員を対象にして、当該社会の支配イデオロギーシステムへの社会化を大衆的に行っているのである。つまり大衆を作り出して、大衆を「ドレサージュ：調教」(ibid : 39) し、「雇用者／非雇用者に区分される階級構造」の中で位置づけられた大衆の一人一人が、それがあたかも自らの自由な選択によるものであると信じ込ませ、現存社会組織の一構成員としての役割を果たさせるといった生産諸関係の再生産において極めて重要な装置なのである。

7. おわりに

アルチュセールのイデオロギー論は以下のように概括できる。

まずある限定されたイデオロギー的思想の統一性を示す「プロブレマティック」、いわばイデオロギー的空間がある。それはある社会のなかで生きている人々が発想し、問い、それに対する答えが求められる諸思考活動の可能な範囲、つまり自己確認における閉じられた循環的な思考の世界である。そして、われわれはわれわれが属するイデオロギーの世界のなかで考えることを学び、この世界のなかで成長し、この世界において行動し生きることを学び、この世界に対して自己を説明するのである。

次にイデオロギーは観念的なものではなく機能するものであり、「主体」の「プラチック (実際行動)」によって物質的に実現されるものである。イデオロギーは個人を「主体」ならしめることによってしか機能し得ない。イデオロギー的ディスクールは必ず「主体」をシニフィアンとして含んでおり、個人がそのディスクールのなかの「主体」として自己を再認識する時、個人は「主体」になります。そして「主体」が日常生活の様々な場で、‘その場でとるべき行動をとる’「プラチック」、つまり慣習的かつ实际的行為を行うことによってイデオロギーは物質的に実現される。それゆえ自爆テロはイスラム原理主義イデオロギーの「プラチック」の一例でしか

い。以下同様に「主体」はイデオロギーの担い手として「プラチック」を自主的に成し遂げるながらイデオロギーの一要素として機能する。

イデオロギーの作用および拡散を保証するのは「国家イデオロギー装置」の諸制度である。国家は宗教的、教育的、法的、政治的など様々なイデオロギー装置を機能させることで支配イデオロギーを拡散して現存の秩序を議論の余地のないものとして固定化し、既存の生産諸関係の持続に努めるのである。

アルチュセールの「国家イデオロギー装置」による再生産理論は、欧米の「再生産論」としての学校理論に大きな影響を与える。「再生産理論」は、「学校教育が制度の実践、支配イデオロギーの実践でしかないことを客観化することによって、日々の教育プラチック世界がいかなるものかを開示する域を切開した」(山本1970:130)のである。

またアルチュセールのイデオロギー論はベシュエのディスクール理論に受け継がれる。ベシュエはアルチュセールのイデオロギー論を受けて、ディスクールをイデオロギーの物質性、つまり言語的具現とみなす。イデオロギー的立場と陳述、そしてことばの意味などを中心として展開されるベシュエのディスクール論の考察を今後の課題としておきたい。

参考文献

- アルチュセール. L. Althusser. 1965.『マルクスのために』河野健二／田村俣／西川長夫訳. 平凡社.
- アルチュセール. L. Althusser. 1970.「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』柳内隆訳. 三交社.
- イーグルトン. T. Eagleton. 1999.『イデオロギーは何か』大橋洋一訳. 平凡社.
- 今村仁司. 1997.『アルチュセール—認識論的切断』講談社.
- コニール. J. Conilh 1968「マルクス主義と構造主義—ルイ・アルチュセール論」『構造主義』伊東守男訳. サイマル.
- 桜井哲夫. 1996.『フーコー』講談社.
- フレスーキム. SH. Fraysse-Kim. 2009.「閉ざされた地平線：北朝鮮の小学校の教科書に見られる国民アイデンティティの言語的構築の実情」in *Journal of Language, culture and Communication*. V10. N 2. pp.47-64.
- フレスーキム. SH. Fraysse-Kim. 2007.「教科書ディスクールにおける‘我々意識’の構築の様子」in *Journal of Language, culture and Communication*. V 9. N 1. pp.13-46.
- プラムナッツ. JP. Plamenatz. 1972.『イデオロギー』田中治男訳. 福村出版.
- ビュルゲラン. P. Burgelin. 1967.「知の考古学—ミシェル・フーコー論」『構造主義』伊東守男訳. サイマル.
- マクドネル. D. Macdonell. 1990.『ディスクールの理論』里麻静夫訳. 新曜社.
- 柳内隆. 1970.「アルチュセールの解説」『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』三交社.

- 山本哲士. 1970. 「ルイ・アルチュセールのプラチック論」『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』三交社.
- リクール. P. Ricoeur. 1980 『解釈の革新』久米博／清水誠／久重忠夫訳. 白水社.
- Bernstein.B. 1971. Curricula as Socially Organized Knowledge in *Knowledge and Control*. edited by M.F.D.Young. Macmillan.
- Bourdieu. P.1976. The school as a conservative force: scholastic and cultural inequality in *Schooling and Capitalism* edited by Roger Dale. Routledge & Kegan Paul.
- Bourdieu. P.1976 System of education and systems of thought in *Schooling and Capitalism*, edited by Roger Dale Routledge &Kegan Paul.
- Bourdieu. P.1980. *Le sens pratique*. Minuit .
- Bourdieu.P & Passeron .J.P. 1970. *La Reproduction*. Minuit. (P.ブルデュー &J. P.パスロン 『再生産』宮島橋訳 藤原書店1997)
- Dalem.A. 2005. Idéologie dans *Dictionnaire culturel en Langue Française*. Robert. Paris.
- Foucault.M. 1969. *L'archéologie du savoir*. Gallimard. (M. フーコー 『知の考古学』中村雄二郎訳河出書房新社1981)
- Garo.I. 2008. La coupure impossible. L'idéologie en mouvement, entre philosophie et politique dans la pensée de Louis Althusser. In *Althusser : une lecture de Marx*. Puf.
- Marx.K & Engels.F. 1964. *The German ideology*. Progress Publishers. Moscow.
- Pêcheux.M. 1975. Mises au point et perspectives à propos de l'analyse automatique du discours dans *Langage*. N. 37. Didier-Larousse.
- Pêcheux.M. 1981. *La Langue Introuvable*. François Maspero.
- Pêcheux.M. 1983. *Language, Semantics and Ideology*. The Macmillan press.
- Young.M.F.D. 1971. An Approach to the Study of Curricula as Socially Organized Knowledge in *Knowledge and Control*. edited by M.F.D.Young. Macmillan.
- 르불. O. (O. Reboul). 1980. 『언어와 이데올로기』(홍재성역). 역사과 비평사2003 (Reboul.O. 1980. *Language et Ideologie* (ホン・ジェソン訳) 歴史と批評社. 2003)